

第203回 日文研フォーラム

■

「気」の思想・「こころ」の文化
言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方

Cultural Conception of “Ki” and “Kokoro”
Linguistic Perspectives on Japanese and Thai Mentality

■

チャワーリン・サウエッタナン
Chavalin SVETANANT

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 片倉もところ

● テーマ ●

「気」の思想・「こころ」の文化

言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方

Cultural Conception of “Ki” and “Kokoro”
Linguistic Perspectives on Japanese and Thai Mentality

● 発表者 ●

チャワーリン・サウエットナン
Chavalin SVETANANT

チュラーロンコーン大学 専任講師
Lecturer, Chulalongkorn University

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2007年6月13日 (水)

発表者紹介

チャワーン・サウエッタナン

Chavalin SVETANANT

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略 歴

2003年 3月 Ph.D. (京都大学人間環境学研究所)

2003年 6月 チュラーロンコーン大学 専任講師

著書・論文等

1. *A Half-Century in Thai Studies*, translated from 『道は、ひらける—タイ研究の五〇年』 石井米雄著 Published by the Toyota Thailand Foundation and the Foundation for the Promotion of Social Sciences and Humanities Textbooks Project, 2007
2. “Good or Evil? : Perspectives from Japanese Proverbs and Expressions” *Journal of the Faculty of Arts*, 35-1 (January - June), 2006
3. 「タイにおける古代日本文学受容の実態とタイ古典文学教育の紹介」『古代日本の言語文化』奈良女子大学国際シンポジウム論文集、2005年 8月
4. “Japanese Tea and Sa-ke in Thailand,” *Collection of Articles on Japanese Food and Beverage in Thailand*, Faculty of Arts, Chulalongkorn University, 2005
5. 「タイ語『グリーン』の語誌」『日本文化環境論』第 5号、2003年 3月
6. 「心理・感情を含意する形容詞—タイ語と日本語の比較『やさし』を中心に」『日本文化環境論』第 4号、2002年 3月
7. 「『チャイ』と『気』—タイ語と日本語の対照的研究」『日本文化環境論』第 3号、2001年 3月

はじめに

東洋人は感性的な面において繊細であるとはよく評価されます。日本語とタイ語との間には、敬語の発達、男女間の言葉の違い、あるいは「気・こころ」を用いる多数の表現などといった感性的な面における共通性が多く見られます。それにもかかわらず、それぞれの思考や情緒を表出する時に、両言語の「心のあり方」によって微妙に違ったニュアンスが見られるのです。本発表は、そういう考えを踏まえ、歴史的・対照的分析を通して、両者の心的態度や意識構造を明らかにするとともに、それぞれの国民がどのように物事を感じ取るのか、どのように外界に接して物事を理解するのか、日本人とタイ人の「国民性」の一面を客観的に考察していきたいと思えます。

「こころの文化」とは

「こころにも文化なんてあるのか？」と疑う方もいるかもしれませんが、確かに「こころの文化」ということをあまり耳にする機会はありませんね。しかし、「食文化」、あるいは「生活文化」などはよく聞いたりしていませんか？ 「食文化」や「生活文化」と

という言葉があるように、実は人間の知的・情意的な精神活動を果たす「こころ」にも、ある国の独特の食・衣装・住まい・生活などと同じように、それぞれの国民のモノの捉え方・感じ方、または表出の仕方によるいくつかの違いがあります。

たとえば、「恥」・「笑い」・「愛情」または「怒り」というような情緒について考えてみましょう。それぞれの国の人は、同じような捉え方・感じ方、または表出の仕方をするのででしょうか？ 日本人は、「旅の恥は、かき捨て」というほど、他の国の人より普段の生活では他人の目を気にしながら行動すると言われています。ですから、たとえ同じ場面で同じようなことをしようとしても、「恥」というものに対する、日本人と外国人の捉え方・感じ方、そして表出の仕方、つまり「こころの文化」が違ってきます。

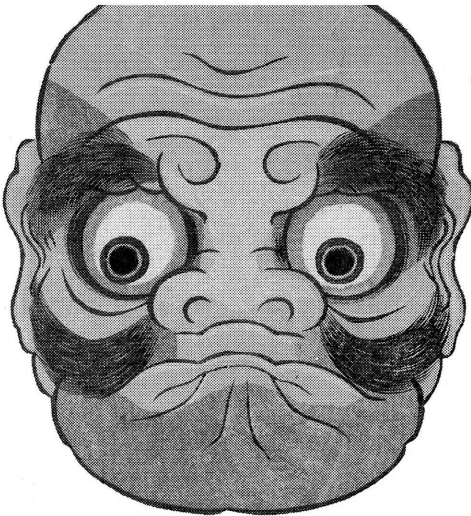
他の情緒に対する「こころの文化」も同様です。私はこの前二時間のスペシャルドラマを見ましたが、そこでは実の息子を亡くした母親が悲しみで号泣していたのに、急大声で笑い出してきて、テレビの前の私には、本当にカルチャーショックでどう受け止めればいいのか分かりませんでした。きっと悲しみが溢れてきて言葉にできないぐらいだろうしよもないのだらうと思います。私が馴染んでいるタイ文化には、「怒り」から「復讐心」に変わって、それを抑えられなくて笑い出したりすることがあり、たまにはそれを小説やドラマなどで見るがありますが、こういう「悲嘆」から「笑い」に展開し

ていく事例についてはなかなか経験したことがありません。そういう様々な現象を文化の一つとして、ここで「こころの文化」または「それぞれの国民のこころのあり方」と呼ぶことにしておきます。

人間の感受性と言葉との密接な関係

では、次に皆さんにこの絵をよくご覧になっていただきましょう。どのように見えるのでしょうか？ 機嫌よさそうな顔に見える方、機嫌悪そうな顔に見える方、そのどちらもあるのではないかと思えます。

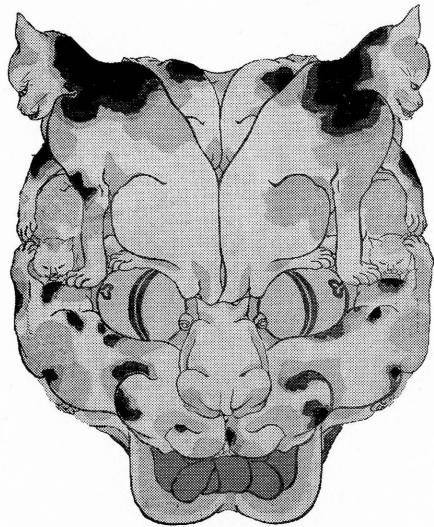
そして、次の絵はどうでしょうか？ どんなふうに見えるでしょうか？ こちらの方は、全体として合わせて見る大まかな見方と、部分的に細やかに見る見方がありますね。



この二つの絵は、江戸時代の「遊び絵」と呼ばれるものでよく知られています。最初の絵は、上下逆さまにして、それぞれ違う顔を表わす絵ですから「上下絵」と言いますが、後の絵は、複数の物を寄せ集めて別の物体を表現した絵なので「寄せ絵」と言います。

実は、これらの絵は、私が先ほどお話した「こころの文化」、あるいは「こころのあり方」を模擬したものであります。人間という生き物は、ある一つの能力を共有しているのですが、それは世界中のあらゆる物事に接した時に、それらによって様々な感情を生み出そうとする感性豊かな能力です。そういう優れた能力は、国籍を問わずすべての人間にあつて、「感受性」における「普遍性」とも呼ばれています。

しかし、そういう人間の「感受性」における「普遍性」は、ある範囲、あるいは、あるフレームによって抑えられています。それはどういうものかという点、これからのお



話の主題となる「言葉」という範囲の問題なのです。

先ほどお見せした二つの絵のように、同じものを体験していても、左の方から見るのに慣れている方と、右から見るのに慣れている方の両方がいらつしやると思います。同様に、絵の構成の細やかな部分を把握できるという方もいらつしやれば、大まかなものしか見えないという方もいらつしやると思います。普遍的な人間の感情のようなものを「絵」にたとえたとしたら、皆さんの「それぞれの見方」は、それぞれのこころの文化の受け入れ方と同じようなものになります。今回の小さな実験では、少し自分の見方を変えてみれば違ったものがすぐ見えてくるのですが、実際にはその見方、あるいは世界観こそが、それぞれの言葉によって制約されているので、決して簡単には変えることができません。

少し哲学っぽくなってしまいました。言語学的に言い換えてみれば、人間は「言葉」という「フィルター」を通して、常にある決まっている方向に導かれ、人間の本来の感受性の能力があるにも関わらず、自分が毎日使っている「言葉」、いわば「文法」なり「単語」なり「表現」なり、それらの「フィルター」を通して、外界を当たり前のよう感じ取るのです。

ですから、たとえ同じような物事を体験していても、人間はそれぞれの時代・それぞ

れの民族によって捉え方も違いますし、かりに同じような捉え方をしても、その物事に対する表現・表出の仕方も違うものですから、それぞれの時代及び国民性という「フィルター」によって、「こころの文化」あるいは「こころのあり方」も違ってくるわけです。

High Context Culture としての日本文化

Edward T. Hall というアメリカの人類学者は、あらゆる感情を明白に言葉や行動に出す Low Context Culture の西洋文化に対して、日本文化を始めとして、東洋文化を High Context Culture に分類しています¹。なぜならば、後者の文化には「言葉を使いたがらず、状況などの文脈を重視する」という傾向が見られるからです。私自身は日本にはかれこれ一〇年以上も関係してきましたが、日本人には確かに「言葉」より「雰囲気」の方が好まれているように思います。

これについては、国語学者の阪倉篤義先生も言っておられます。つまり、物理を抽象的な理屈として理解するよりは、むしろ**感覚的に**とらえるということの方が日本人に向いているということです²。それを先ほど単純に「雰囲気」と言ってしまうましたが、正

確に言えば、その「雰囲気」というのは、「その時のコンテキスト」「その瞬間の状況」ということで、たとえばこういう場面ならある決まった言葉を使う、こういう状況ならある決まった行動を取る、あるいはこういう流れであればある決まった感情を抱くというように、日本文化ではそれぞれのコンテキストによってやるべきことが既にほぼ決まっています。そういう「感覚的な捉え方」のやり取りにおいては、特に互いに言葉を交わす必要もなく、日本人同士であれば分かり合えるという日本人の誰もが共有している常識のようなものです。

言葉の面から見ても同じです。たとえば、こういう言葉は、ある決まった場面ではある決まった意味をもつけれども、それと違った場面で使うとまた違った意味になるといふ、一つの言葉の裏に複雑な意味を含める日本語も実に多いです。私は以前「やさしい」という語源と用法について研究しましたが、それにも日本人の High Context 文化が表わされていて、使う場面によって「思いやりのある人」という褒め言葉の「やさしい」もあれば、どれもこれもイマイチというような人に対しても、「やさしい人ですね」と言っても、実は見下しているというような「やさしい」もあります。そういう意味のニュアンスの違いは、ただひたすら日本語を勉強して言葉の意味を暗記するだけでは、なかなか理解したいですね。

日本人の感情の表出とタイ人の感情の表出

実は私が生まれた故郷の「タイ」も、日本と同じように「こころ」を非常に大切にす
る文化を持ち、感性的な面においても大変繊細であるとよく言われています。ただし、
長い間日本語を使って日本に住んできたタイ人の私に言わせれば、両国の文化は感情に
対して繊細ないし鋭敏でありながらも、日本人とタイ人の間には外界との接し方や物事
の感じ取り方、または理解の仕方などについてはずいぶん違っているように思います。

まず、タイ人は日本人のように自分の中に溢れる情緒を堪^{こら}え、自閉的な態度を取って
感情を表に出さないようなことはしません。もちろん、公共の場で西洋人のように率直
に意見や感情を何もかもぶつけるといふ習慣もありますが、自分の仲間同士であれば、
うれしいならうれしいというし、悲しいなら悲しいと言葉にします。怒る場合にはちや
んと相手に伝わるように、率直な表現や行動で表わしてできるだけ自分が感じているも
のすべてを打ち明けることがタイ人の一般的な態度です。

それゆえに、タイ語の感情表現も非常に数が多いのです。日本人が怒る時に、たとえ
ば「怒る、腹が立つ、頭にくる」など様々な表現が取り上げられるのですが、実際に怒
る時には日本人はそれらの言葉を口にするより「沈黙」で表わすことが多いのではない

でしょうか。その「沈黙」という表現は、日本文化において High Context Culture を表わす心のあり方の一つです。邦画のシーンにもよく出てくるように、「怒り」だけではなく、「愛情」や「憎しみ」などの表現としても決して少なくないでしょう。

しかし、タイ人の怒っている時は違います。タイ人はほとんどの場合、感情を堪^{こら}えたりしないから、タイ語の怒り表現はそういうタイ人の怒りの程度に応じて、怒りの「度合い的」にも（どれぐらい怒っているのか？）「種類の」にも（どういう原因で怒っているのか？）、または「対象的」にも（誰を怒っているのか？）使い分けられているのです。たとえば、親や恋人など大切な人に自分の誕生日を忘れられた場合には、「ゴーン」と言つて、機嫌をとつてもらうために小さな怒りを自分の大切な人だけにわざと可愛く見せたり、仲のいい友達に仲間はずれにされたような場合には、「ノイジャイ」（心を縮める）と言つて、寂しさを伴う少しの怒りを表わしたり、会議などで職場の同僚と議論が少しかみ合わない時には「クウアン」と言つて、ちょっと気に障るという意味の感情表現を使つたりします。

このように、「言葉」というものは、感情を表わす「心のあり方」に、密接に絡んでいるということがお分かりになったかと思えます。そこで、日本人がどういう世界観を持つて物事を理解するかを知りたい時には、日本人を装つて日本人らしい「日本語」と

いう「フィルター」をかけて、世界を眺めることしかありません。逆に、自分が育った当たり前のような世界観から、一瞬でも抜け出そうとすれば、普段自分が使っている言葉の「フィルター」を取りはずして、たまにそれと違った「フィルター」をかけて、外国語などを通して世界を眺めることが良いでしょう。

ということ、これからタイムスパンが違った遙かな昔の日本語と、文化的にも思想的にも違ったタイ語という二つの「フィルター」をかけてみて、もしも自分が昔の日本人になったら、もしも自分がタイ人になったらと想像していただきながら、物事に対する新たな「心のあり方」を体験していきましょう。

「心のあり方」を表わす Heart Words — その①：「気」の意味・概念

まず、皆さんに覚えていただきたい用語があります。人間の知的・情意的な精神を表わす言葉、つまり人間の「心のあり方」を表わす言葉を、*heart*では「Heart Words」と呼びます。「Heart」または「ハート」というのは、皆さんもご存じの通り、日本語で言う「気」または「こころ」という言葉に当てはまりますが、細かくみれば日本語における「Heart Words」は「魂」「靈魂」「情」「精神」それから、情意を表わす「感情」「心

情「氣持ち」など数多く挙げられます。今回は、「チャイ」というタイ語の「Heart Words」と比較するために、日本語の「Heart Words」の代表として、日本人がもっともよく使う「氣」と「こころ」の実体とそれぞれの用法を取り上げていきます。

では、「氣」という語彙から見いきましょう。日本人は「氣」を使わずに一日過ごすことができないほど「氣」を好んでいるとよく言われています。前林清和先生の『氣の比較文化』³という本にはこういう面白い文章が書いてあります。「氣」が何回登場したのか、どうぞ皆さんも数えてみてください。

「元氣よく家を出たが、満員電車で氣分が悪くなり、会社について氣を取り直して仕事を始めたが、お客さんに氣を使い、上司の氣まぐれで怒られ氣を落とし、夕方いつも氣が合う同僚に飲みに行こうと誘われたが氣が乗らず、家に帰れば氣が休まる暇もなく、子供の遊び相手、近いうちに氣ままな旅にでも出ないと病氣になってしまうと氣遣う妻と晩酌し、いい雰囲氣になって氣分転換。」

これほど頻繁に使う人はいないと思いますが、実際に毎日このような表現のどれかを使って日常生活を送っている人もきっと少なくないでしょう。

では、「氣」とは一体何ものなのか、まず典型的な言語学の方法で国語辞典の記述を参考にしてみましょう。

『角川古語大辞典』

《名》漢語。森羅万象の生命力発動の源泉となる、目に見えない自然の活力。また、人間その他、有情のもの肉体的、精神的な活動のみなもとをなす、内在的な心の働きをいう。

『日本国語大辞典』

- 《名》一 変化、流動する自然現象。または、その自然現象を起こす本体。
- 二 生命、精神、心の動きなどについていう。自然の氣と関係があると考えられていた。
- 三 取引所で、氣配（きはい）の事。人氣。

辞書の記述をさつと理解しようと思えば、とりあえず、「氣」とは、はっきりと表わすことのできない実体不明の何かだというイメージが強いですね。そんな実体不明なものではありませんが、私もここにいらっしやる皆さんも、きつとそんな目に見えない極め

て曖昧な「氣」の存在を感じることができません。す。

以上の国語辞典における「氣」の定義をまとめてみれば、「氣」そのものの存在する場所によって二つの意味が説かれています。その一つは「自然に漂う氣」で、もう一つは「人間の身体内部に生きる氣」です。ご存じの通り、日本人は「氣」という文字を中国から借り、その文字によって数多くの言葉を作り出しました。浅野裕一は氣の原義について次のように述べています。

『氣』の原義は、水蒸氣を指すと考えられる。このことは、『氣』の概念について、様々な示唆を与える。水は温度差に応じ、氷（固体）↓水（液体）↓水蒸氣（気体）と、性質を変化させる。そこで氣の概念は、一定の形状に固定されぬ変化の性格を内在させている。すなわち、『氣』は、固体にでも液体にでも氣體にでも、自在に姿を変えられるのである。また水蒸氣は、水面や地面から立ち昇り、雲になったり、雨や雪になったり、さらには河川の水となったり、湖沼の水となったり、地下水や土中の水分になったりと、姿を変えながら、天地の間を往来・循環する。そこで氣の概念は、循環の性格をも内在させることになる。

一方、現代日本語においては、心理的作用としての「氣」が多く用いられています。「氣が重い」、「氣がする」、「氣が立つ」、「氣が多い」、「氣が置けない」、「氣になる」などのような慣用的表現をいくつも思い浮かべられますが、たとえば「天気」、「氣象」、「氣化」、「換氣」などのように、「氣」が人間の精神的な作用以外の、いわば物質的なものを指す語彙はあまり出てこないようです。ただし、「氣」がこうした二面性を持つことは、現代日本語に限ってのことではないと竹田健二は分析しています。

次に示すように、古くは『日本書紀』における「氣」の中には、周王室の史官や陰陽流兵学が行った「氣」の観測を彷彿とさせる形で説かれているものがある。

天に赤き氣有り。長さ一丈余。形雉尾に似たり。(推古二十八年十二月)

天の暖なること春の氣の如し。(皇極元年十一月)

『日本書紀』には、一方で氣息を意味する「氣」など、人間に関わる「氣」もしばしば説かれている。「氣」は日本でも古くから、人間の身体に関するいわば精神的なものであると同時に、天地自然の間に存在するいわば物質的なものでもあった

のである。

なお、現代日本語においては、精神的なものの「氣」が特に多いと見られます。また、そうした「氣」の表現は実に多様であるのに対して、「氣」がもつ天地自然の間に存在するものとしての面はあまり強く意識されていないのです。竹田は、近世以降の日本語で多様な形で説かれている「氣」は、主として精神的なものとしての「氣」であると記しています。人間の心の動きという意味に関しては、言うまでもなく、本来の意味を拡大発展させ、独自の意味として定着したものです。確かに、「氣」という文字を中国から輸入したとはいえ、日本語としての「氣」に加えられていった独自の部分は日本的な用法だと言えるでしょう。さらに、日本語に定着した「氣」の大部分が精神を表示する事例で占められる現象は、心情を好む日本人の体質を見事に反映していると思われまふ。『氣の不思議』では、日本人が使っている「氣」の意味とそれぞれの例が次のように取り上げられています。1〜4は一見して中国からの直輸入であることがすぐお分かりになるかと思いますが、7と8はもっと細かく分けることも可能で、日本語の「氣」の使われ方の特徴を示しているものです。

1. 万物の根本…天地正大の気
2. 自然の現象…天気、氣象、氣候
3. 物質、ガス体…空気、水蒸気、気体、気化
4. 生命力…元気がある、精気あふれる
5. 呼吸…氣息、気がつまる
6. 意識…氣を失う、氣が遠くなる
7. 精神…①（全般）氣を静める、氣がめいる
②（傾向）氣が短い、氣が長い
8. 心理…①（全般）氣がきく、氣が散る ②（意志）氣をいれる、どうする氣か
③（関心）氣がある、氣を持たせる ④（心配）氣をもむ、氣に病む
⑤（感情）氣まずい、氣を悪くする ⑥（注意）氣をつける
⑦（心地）生きた氣がしない
9. 全体的なムード…山の氣、火の氣、その氣
10. その物の特徴…酒氣、氣のぬけたビール

「心のあり方」を表わす Heart Words — その② : 「ココロ」の意味・概念

次に、「ココロ」の方を検討していきましょう。「ココロ」という語は、先ほど述べてきた「氣」と異なつて、中国から受容した言葉ではなく、もともと大和言葉であつて、後から「心しん」という漢字に当てられた言葉です。

では、先ほどの「氣」と同じように、まず国語辞典における「ココロ」の意味から見てみましょう。

『角川古語大辞典』

《名》①人間の精神活動の根本となる、知・情・意の本体。精神。「身」「体」の対。

②心の中。表面に現れない考えや気持。その時その時における心的状態。③思慮。心構え。分別。④なさけ。思いやり。親しみの情。ある個人に対して向けられる感情。⑤内々に心を寄せること。ひそかに情を通ずること。浮気をしたたり内通したりする場合にいう。二心（ふたごころ）⑥つもり、下心。行動の基底に潜む意思。⑦性質。生れつき。⑧心底。本心。⑨意味。事のわけ。「なぞ」や「しやれ」の真意。⑩事情。内情。⑪風情。情趣。趣向。⑫物の道

理。⑬たしなみ。⑭物の中心。手の中心を「たなごころ」というなど。特に池の中心をいうことが多い。⑮歌学用語。和歌の内容。⑯心臓。胸。胸先。

『日本国語大辞典』

【心・情・意】

《名》人間の知的、情意的な精神機能をつかさどる器官、また、その働き。「からだ」や「もの」と対立する概念として用いられ、また、比喩的に、いろいろな事物の、人間の心に相当するものにも用いられる。精神。魂。

- 一 人間の精神活動を総合していう。
- 二 人間の精神活動のうち、知・情・意のいずれかの方面を特にとり出していう。
- 三 人間の行動の特定の分野に関わりの深い精神活動を特にとり出していう。
- 四 事物について、人間の「心」に相当するものを比喩的にいう。
- 五 人体または事物について「心」にかかわりのある部位や「心」に相当する位置をいう。

このように様々な国語辞典を調べてみても、非常に抽象的な性質を持つ「こころ」の

実体をなかなかつかむことができません。とはいっても、私たちの解釈の問題だけではないようです。夏目漱石のあの有名な小説、「こころ」というタイトルも、タイ語訳版も含めて、様々な外国語版においては、明確な訳がつけられず、ローマ字で書いた「K-O-K-O-R-O」がそのまま使用されているのです。

『広辞苑』では、「こころ」が動詞の「凝る」、または「ココル」といった語源から来ているのではないかと推定されています。動詞の「凝る」はまた「ココル」ともいうのですが、その「凝る」という意味は、分散しているものが寄り集まってかたまるということです。たとえば、水から凝ったものを「こおり（氷）」というし、魚の煮汁などを冷やして凝固したものを「煮こごり」と呼んだり、さらには、日本の神話では日本のことを「自凝島」と言ったりして、「おのずから凝った島」という意味を表わしています。それに従って、日本の「こころ」も「凝ってかたまったもの」として把握され、人間の「たましい」は、そもそも空気のようにふわふわと浮動していたのですが、それが次第に凝りかたまつて、「こころ」の形が作られたのではないかと考えられます。

思想史では、「こころ」を問題にして、「純粹と無私のこころ」・「人の真心」というような様々な「良心論」が取り上げられています。その一つの例として、本居宣長（一七三〇—一八〇一）の「物の哀れを知る心」について少し触れておきたいと思えます。

本居宣長によれば、「こころ」というのは、「物の哀れを知る」ものとして把握されています。要するに、宣長にとって「こころ」とは、ただ物事の「理性と智慧」を知るだけではなく、全的な認識で、「知ると感ずる」機能を果たしているものだと解釈されています。それこそが、「良くも悪くもただ生まれのままの心」・「自然のあるがままの心」あるいは「人間の生まれながらの真心^{まごころ}」でもあると述べられています。

これは確かに現代日本人の「こころ」とは多少のズレがあるかもしれませんが、これから話していくタイ語の「チャイ」というタイ人の「心」に非常に似ている概念なのではないかと思われます。

「心のあり方」を表わす Heart Words — その③：「チャイ」の意味・概念

「チャイ」という言葉は、日本語の「氣」に負けないくらいタイ人に大変好まれています。私もタイ人の一人なので断言できませんが、「チャイ」という言葉を使わずに、タイで一日過ごすことは本当に困難であるに違いありません。タイ人に不可欠なその物体は、現代日本語において「質的に」扱われている「氣」と「こころ」とはかなりの違いが見られ、頭や胸・手足などという「身体の一部」と同じように「量的に」生き生きと

把握できるものです。

「チャイ」が初めて登場したのは、タイ文字ができた十三世紀スコータイ時代からですが、その意味は長い間固定されていて、それから七〇〇年ぐらい経ちましたけれども、今でもほとんどの意味が変わっていません。タイでは十三世紀に「石に彫り付けた碑文」というものがいっぱい残っていますが、その十三世紀に刻まれたスコータイ時代の碑文に現れる「チャイ」の意味と、現在インターネットのブログやメール、またはチャットの世界に現れる「チャイ」の意味とは、ほぼ一〇〇%同じ意味を持っているのです。

タイの国語辞典を調べたところ、「チャイ」という語には次のような意味が取り上げられています。

人間の一部を成し、思ったり、考えたり、認識したりするもの。心臓。呼吸。(動物にも人間にもある) 精神的な動き・情緒・感情・気持ちを感じるもの。(転義で) 靈魂れいこん。または、物事ものごとの中心や重要部や心臓部

などという意味が説明されています。

要するに、「チャイ」というのは、日本語の「気」と「こころ」と異なって、「気持ち」、

「感情」、「一時的な気分」という意味合いがまったく見受けられず、むしろ「それらの精神的な動きを感じ取るもの」、「人間と動物といった生き物の、すべての感情や思考を担う主体」であり、すなわち、宣長の言う「物の哀れを知る心」に近い性質を持つていふと思われまゝ。

生き物の身体の中で一番大切に扱われる「心臓」から派生した「チャイ」は、このように、「心臓病」や「深呼吸」という医学の専門用語から、「理解する」、「関心を持つ」などという理性的な認識を通して、「悲しむ」や「喜ぶ」などという感情表現まで、知的にも感情的にも幅広く使われています。

さらに、ぴったり相当する訳語が見当たらない日本語の「わび」「さび」と同じように、独特の文化の概念や、社会的な価値観を表わす用語としても用いられています。たとえば、「カムランチャイ」（＝チャイの力）と言うと、「意志力」・「精神力」というような意味で、「ナムチャイ」（＝チャイの水）と言えば、「人間らしい思いやり・心意気」という意味であったり、さらに、「クレーンチャイ」と言えば、「誰かに対して押し付けるのは気が進まない、または配慮しながら行動する」という意味で、日本語の「遠慮」や「気兼ね」というような意味に近いのです。

要するに、「チャイ」という言葉は、「理性より感情を重視するタイ文化」にとつても、

仏教徒のタイ人にとっても、すべての人間に欠かせない要素で、人間の善意・悪意の元や、悟りの元など、一番重要な役割を果たしているものに他なりません。

英語の「Heart」、「Mind」との比較

そのついでに、英語の Heart Words にも触れておきたいと思います。英語の場合、Heart Words と言えば、「Heart」及び「Mind」という二つの言葉が思い浮かんでくると思います。日本語と同じように、精神状態を表わす時に、ほとんどの場合、この二つの言葉が使い分けられているのですが、英語の「Heart」と「Mind」は、日本語と異なっていて、それぞれの用法はかなりはつきりと区別されているようです。たとえば、「Heart」は、「Broken heart」（＝失恋する）や「kind-hearted」（＝心優しい）などというような感情的で非論理的な意味を表わしているのですが、「Mind」は「make up your mind」（＝決断する）、または「keep in mind」（＝頭に入れる）という論理や分析的な意味を表現しているのです。こういった欧米人の Heart Words の分類は、どうやら十七世紀の「The Age of Reason」という「理性の時代」辺りから、左右に分かれる脳の分類とともに続けられてきたようですが、そういう感情を果たす部分と論理を果たす部分にはっきり分か

れる人間の精神的な働きというような思想は、日本人とタイ人の概念にはないようですね。

その上、欧米の人々は東洋人である日本人やタイ人ほど、「Heart Words」の表現を幅広く、そしていろんな場面で精神活動を表わすこともあまり見られません。そういったことも、おそらく「感情より理性を重視する欧米社会」の一面を反映していると言えるでしょう。

後半に入る前に、一旦「気」「こころ」そして、タイ語の「チャイ」という概念について、簡単にまとめておきたいと思います。まずは、単純なタイ語の「チャイ」に対して、日本語には、少なくとも二つの言葉の選択があります。つまり、「ハート」そのものが、日本語的な用法によって「気」と「こころ」に分けられています。ただし、日本語の「気」と「こころ」は、語源的な由来の違いがあるため、ある程度、機能的に分担して働いている英語の「Heart」及び「Mind」と異なり、その二つの語の境界線は非常に漠然としています。

それぞれの Heart Words の用法

では、日本人とタイ人の心のあり方をもう少し具体的に把握できるように、次にそれぞれの Heart Words の実例を検討していきたいと思えます。

まず「氣」と「こころ」をめぐる表現ですが、私は、今回古代から使われてきた「こころ」と中世頃に和語化された「氣」を対象にして、十四世紀「室町時代」から「江戸時代」までの間に、複合語を除いて、「氣」と「こころ」を使う表現のデータベースを作りました。その結果、「氣」を使う表現は、合計二〇七例、「こころ」を使う表現は合計一五二例でかなり多数の例が見つかりました。

一方、「こころ」をめぐる表現は、古代・中世から近現代までの間に、あまり意味に変わりはなく、たとえば感情を動かすことや説得して相手の気を変えようとする事を「心を動かす（古代／中世）」と言ったり、心にしっかり覚えておくということを「心に留める（古代）」と言ったり、お互いに心の底まで知り合っている友達を「心の友（近世）」と呼んだりして、現代人の我々にとっても、字義通りに解釈することが可能であって、たいへん分かりやすい用法です。

それに対して、「氣」をめぐる表現は、意味の拡大及び意味の変化がかなり激しくて、

中世辺りでは、「氣を伸ばす」、「氣を直す」というように、極めて具体的に生き生きとした表現が多かったのですが、近世に入ると、そういう生き生きとした表現が徐々に消えてしまつて、「氣もそぞろ」、「氣の毒」、「氣になる」、「氣は心」、「氣が氣でない」、「氣が分らない」などという固定性が高い慣用句が増えてきました。

なお、本発表では「字義通りだから解釈しやすい」や「具体的に生き生きとした表現」など、言語学用語を時々使っていますが、それはどういう意味なのか、ここで一旦説明したいと思います。

たとえば、「氣を伸ばす」という表現ですが、まず皆さんに「伸ばす」という動詞を想像していただきたいと思います。「伸ばす」と言えば、「足を伸ばす」・「手を伸ばす」というように、「足や手をまっすぐにして体を楽にする」という動作を思い浮かべますね。そこで、今ではもう使わなくなりましたが、室町時代によく使われていた「氣を伸ばす」という表現の意味を当ててみてください。どういふことを指すのでしょうか。「氣を伸ばす」ということは体の一部である「足」や「手」と同じように、「氣をまっすぐにして氣持ちを楽にする」という意味なのです。こういう意味を理解する過程が、「字義通りだから解釈しやすい」、あるいは「具体的に生き生きとした表現」などということなのです。少しお分かりいただけただけでしょうか。

それでは、もう一つの例を挙げてみましょう。中世に使われた「氣を直す」というのもまったく同じです。「テレビを直すこと」や「パソコンを直すこと」と同様に、「乱れた状態の氣を何とかして、元の望ましい状態にする」という意味を表わします。こういう「氣を伸ばす」や「氣を直す」という動詞は、残念ながら現在にはもう使われていませんが、それぞれの表現がかなり具体的に感じられるから、現代人の我々にとっても、確かに分かりやすいですね。

しかし、近世から現代になっていくうちに、「氣」という表現が少しずつ慣用的になってきてしまいました。たとえば、「氣の毒」や「氣もそぞろ」など、そして現在でもよく使われる「氣になる」、「氣にする」というように、かなり慣用度が高くて、字義通りに理解しようとしてもなかなかできません。たとえば、「氣」にある「毒」がなぜ「かわいそう」という意味になるのか、あるいは「氣」というものに「なる」ことなぜ「心配する」というような意味になるのか、などなど、それぞれの語の意味と、全体的な意味とのつながりがありはつきり見られなくなりました。そういう表現は、言語学では、「慣用句」あるいは「イデオム」と呼びます。

一方、タイ語の方の「チャイ」という Heart Words はどのように使われているのでしょうか。十三世紀のスコートタイ時代からの歴史的な用法をすべて探ってしまうと、これも

またかなり長い話になりますので、その要点だけ述べておきます。

「チャイ」をめぐる表現は、七〇〇年前においても、現在においても、たいへん生き生きとしたもので、「質的な」性質を持つ現代日本語の「気」と「ころ」と異なって、その「チャイ」という実体は、「量的な」性質を持ち、かなり具体的に感じられるし、字義通りでも解釈しやすいものです。このような性質は、先ほど述べた古代及び中世の日本語における「気」と「ころ」に非常に似ていますね。

実際に使っている用例を見てみますと、たとえば、「チャイが膨らむ」と言えば「非常にうれしい」という意味であり、反対に「チャイが縮まる」、「チャイが枯れる」、「チャイが溶ける」というと、「非常に落ち込んでいる」、「非常に憂鬱になる」、「死にそうになるぐらい悲しい」という意味になります。

また、「チャイを固める」ということで、「むりやりに頑張る」という精神状態ですが、逆に「チャイを和らげる」というと、「やる気をなくす」という精神状態です。

「チャイ」とその感温性についても、いくつかの表現が挙げられます。たとえば、「チャイを焼いたり、熱くしたりする」と「心配したり焦ったり」する状態を表わすものが多いのですが、逆に「チャイを涼しくする」と「落ち着く」様子になったり、「チャイを暖める」と「安心する」という状態を表わしたり、「チャイにうるおいを与える」と「心

配事から解放されてほっとした」という心理状態を表わします。

それに、積極的な動作を表わす「チャイ」もあります。たとえば、「チャイを緩める」
とのびのびしたり、「チャイを寝かせる」と安心したりします。さらに、「チャイを洗う」
と「辛い過去を忘れてリフレッシュな気分にする」というような意味で、「チャイを立
てる」と「意志を立てる」ことになり、「チャイに入る」と「理解する」という知的な
動作を表わす表現もあります。

また、「チャイ」という主体に、いろんな人の性質を表わすことも多いのです。たと
えば、「壊れたチャイ」と言えば、「悪に染まって、元の良い性格に戻れない人」、「硬い
チャイ」というと「頑固な人」、さらに、比喩的に、「ダイヤモンドのチャイ」と言う
「意志が強い人」、「石のチャイ」というと「思いやりのない人」というように、人の長
期的な性質を表わすこともあります。

このように、タイ人に属している「チャイ」は、様々な精神活動によって、時には膨
らんだり縮まったり、濁ったり湿ったり震えたり、さらに、対象語として熱くされたり
冷たくされたり、和らげられたり固められたり、焼かれたりしているものだとお分かり
になりますね。

では、ここでこれまで述べてきた「氣」・「こころ」そして、「チャイ」という日本人

とタイ人の言語学的な思想をもう一度まとめておきましょう。

中国から受容した「氣」は、「こころ」そのものでもなく、体そのものでもありません。「氣が合う」「氣が重い」というような「人間のこころの状態」を含めて、「万物の本源」、「生命のエネルギー」、「感情」、「氣持ち」、「一時的な気分や機嫌」、「氣質」など、実に多義性にあふれた言葉です。曖昧でありながらも、これほど幅広い意味をカバーできる「氣」は、会話や文章において自分が感じることや、考えることなどを表わす時に、できるだけ自分を避けて客観的に表現したいという日本人の国民性には、非常に使いやすくてぴったりとした機能的な言葉なのではないかと思われまます。

そういった機能的で使いやすい「氣」に対して、もともと和語である「こころ」という言葉は、比較的固定した意味で使われてきて、ほとんどの場合には「喜怒哀楽などの感情が宿るところ」、あるいは、「人間の道徳心」を表わしています。その固定性の強い性質のせいも、曖昧な表現が大好きな現代日本人にはあまり好まれていないようであり、古代から中世までは「氣」より大いに使われましたが、近代になってからあまり表現として使われなくなり、現代日本語においては逆に曖昧に定義された「氣」の表現の方がずっと多いようです。そういう傾向は、ある意味では、日本が High Context Culture になっていく、つまり「言葉通りに理解できること」以上に「空気が読めること」

も求めている現代社会を反映しているのかもしれませんが。

一方、タイ語の「チャイ」は、身体の中で一番大切に扱われる「心臓」という語源から派生したため、身体的な表現となつて、「気持ち」、「感情」、「一時的な気分や機嫌」を表わすのではなく、むしろ「その精神的な動きを感じるもの」という意味が昔から明らかになっています。それにしたがつて、タイ人が使っている「チャイ」というのは、先ほど取り上げた用例のように、「気」と「こころ」よりも具体的に感じられ、「チャイが疲れる」や「チャイが寂しい」という表現のように、体から別のものとして完全に動いている「内部の生命」あるいは「本当の自分」がそうであることを表わしたり、さらに、人間や動物の生命の元となる「靈魂」という転義まで使用されたりするのです。

おわりに

感情にあふれた日本人とタイ人には、感性的な面においてお互い情緒も豊富であるし、Heart Wordsを使った表現も実に豊かであると思られるにもかかわらず、これまで見てきたようにそれぞれの思考や情緒を表わす時、両言語の「心のあり方」あるいは「こころの文化」によって経験の仕方も表現の仕方も違ってきます。

ただし、皆さんに一つ大切なことを忘れないでいただきたいのです。それは、体験の仕方であれ表現の仕方であれ、そういう外界に接して物事を理解することが違うからと言って、感じていることそのものが違うわけではありません。「表現が違うのだから、感情や気持ちも当然違うのだろう」という考えは大間違いです。「Human nature is the same everywhere」(人情はどこも同じ)というように、それぞれの文化によって経験の仕方や表現の仕方が違っているとは言っても、人の感情そのものの根本的な要素、いわゆる人間の「感受性」というのはまったく普遍的なものであります。私は先ほど皆さんにタイ語の「チャイ」という感情表現の用例をたくさんお話しましたが、そういうような表現を今まで使ったことのない日本人の皆さんには、少し変わった表現だと感じられるかもしれませんが、こういう表現をどういった情緒に使うのか、または用法の説明を聞いたなら、そういう表現を使ったことのない会場の皆さんでも「なるほどな」とよくうなずいていただけるでしょう。

要するに、タイ語の表現に現れる感情そのものはタイ人だけでもなく、日本人だけでもなく、人間の誰もが感じられるものであって、ただ自分が育てられてきた文化には、別の文化と違ってそういうような感情を言葉にする習慣がないということもあるし、あるいは、そういう感情を違ったような表現で表わすことも考えられるのです。たとえば、

先ほど私は「チャイが縮まる」・「チャイが枯れる」という表現を取り上げましたが、日本語には確かに「気が枯れる」や「心が枯れる」などという表現が一般的に使われていないのですね。それはただ表現のことであって、日本人だつて落ち込んだりやる気がなかったりするというような気分もあるし、そういう気持ちを表わしたい時だつてももちろんありますね。そんな感情を表わすために、日本語では「しょんぼりする」または「氣落ちする」と言います。もちろん、その両言語の表現の間には、様々なニュアンスがあったり表現に対する使用頻度や好みの差があつたりするのかもしれませんが、同じものを違った角度からどのようにとらえようとするかという問題だけで、最初にお見せした江戸時代の二つの遊び絵と同じようなものです。細かいところまで見えてもあまり関心がないから、わざと大きな絵としかとらえようとしない方もきつといらつしやるでしょうね。これは、「遠慮する」という言葉が存在しないという欧米社会のようなものです。何でも率直にぶつけることを大事にする西洋文化は、「遠慮しない」から、そういう言葉がないというよりは、むしろ「遠慮する」概念自体に、関心が届いていないから、言葉にする必要もないのでしょう。まったく雪が降らない暑いタイにおいて、「粉雪」や「ポタン雪」それに「吹雪」などといったような細かい言い方を使い分ける必要もないことと同じような現象です。

どの国の言葉も人間の「ところ」によって、お互いの「ところ」がある程度伝わるように作られたものであります。ですから、人間及び動物も含まれる生き物たちは、道具として作られた言葉と言葉で結ばれるというより、それぞれのあるがままの「ところ」と「ところ」で結ばれていると、私は信じています。そのような根本的なつながりによって、人間と人間においても、人間と動物においても、どんなに言葉の壁があっても、お互いの「ところ」に溢れている気持ちや思考は何らかの方法で通じ合えるはずで

す。また、人間は確かに「言葉」という抽象的な「フィルター」を利用して、感情や思考を交わしている生き物ではありますが、決して「言葉」ばかりに頼っているわけではありません。もちろん、ある程度決まっている規範でコミュニケーションを取らなければ誰も分かってくれませんが、先ほど述べたように「人情はどこの国も同じ」ということに基づいて、それぞれの心のあり方が文化によって違うけれども、「ところ」そのものは、人間として共通しているものですから、自分の「ところ」から気持ちや思考を積極的に相手に伝えようとする意志さえあれば、「ところ」と「ところ」の文化がどんなに違っていても、きつと相手の「ところ」に伝わると思います。

他者のところを大事にする「思いやりの文化」、それに自分のところを大事にする「自尊心の文化」、それこそが経済や政治の発展よりも、「美しい国」に向けて、日本が目指

すべき国のあり方なのではないでしょうか。そんな願いを込めて、今日の講演を終わりにしたいと思います。

ご清聴、ありがとうございました。

注

- 1 Edward T. Hall (1976) *Beyond Culture*. Anchor Books.
- 2 阪倉篤義 (一九七八) 『日本語の語源』講談社。
- 3 前林清和、佐藤貢悦、小林寛 (二〇〇〇) 『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂。
- 4 浅野裕一 (一九九六) 「中国における「気」の概念」『日本語学』第15巻7月号。
- 5 竹田健二 (一九九六) 「『気』の原義と「気」の思想の成立」『日本語学』第15巻、7月号。
- 6 池上正治 (一九九二) 『気』の不思議』講談社現代新書。

発表を終えて

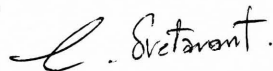
人情深い人間は、自分が育ってきた「こころ」の文化だけでも、確かに十分人間らしく生きることができます。しかし、私は幸いなことに10年以上も「繊細な日本語」を通して、日本文化という「場」で、日本人の「細やかなこころ」に触れ合うことができました。「こころ」を大事にしているタイ文化に育った私は、違った「心のあり方」を持つ日本人の方々に出会って、自分の「こころ」の文化にはない、きめ細かな感情の感じ取り方や、自分の「こころ」の文化とは違った角度から様々な感情をとらえようとしている日本人の精神的な姿勢など、毎日ゆっくりと一つずつ学んでいくことができました。それこそがきっと私の「こころ」の文化の研究の楽しみなのでしょう。

青春時代から日本で過ごしてきたこの10年間は、30代に入った私の人生にとって何よりも有意義なものでした。大学院での学問だけではなく、自分に向き合っ
て頑張ること・人に対する思いやりなど、人間としてのあらゆる生き方を日本人の皆様に教わりました。こうやって研究する上で非常に恵まれた日文研に來られたことに対しても、細やかな心持ちの日本人の方々に出会えたことに対しても、言葉にできないぐらいうれしい気持ちでいっぱいです。

こういう「鋭くて繊細な心遣い」を教えた日本人の皆様に、「私のこころ」より本当に感謝しております。日文研フォーラムでの講演は、本当に緊張感に溢れて、自分の言いたいことがうまく伝えられないこともありましたが、人間と人間の間は、言葉などで結ばれるのではなく、むしろ「こころ」と「こころ」で結ばれるものでありますから、日文研フォーラムに出席して下さった皆様も、こういう「こころ」の研究を通して、どちらかの文化に束縛されず、より自由自在に人間らしく自分のとは違った「こころ」の文化に少しでも触れていただけたら、講演者としての私の責任の一端を果たせたと言えるのかもしれません。

この度、貴重なコメントをして下さったカウンターパートの山田奨治准教授、司会をして下さったテモテ・カーン准教授、それにフォーラムの最初から最後までいろいろと親切にお力になって下さった山田プロジェクトの岡屋純子様、そして研究協力課の皆様、総務課編集担当の高橋悠様に、この場を借りて「こころ」から感謝の意を表わしたいと思います。

皆さん、本当にお世話になりました！



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩①	9.11.11 (1997)	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授)</p> <p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>カール・モスク Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>ヤン・シコラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授)</p> <p>キンヤ ツルタ 鶴田 欣也 (プリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩②	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授)</p> <p>「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授)</p> <p>「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩④	10. 2.10	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授)</p> <p>「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画の身体」</p>
⑩⑧	10. 6. 9	<p>Hiroshi SUMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「化粧の文化地理」</p>

⑩	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	Bruno RHYNER (ブルーノ・リッーネル) (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪	10.10. 6	Ahmed M. F. MOSTAFA (アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ) (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10	Alison McQUEEN-TOKITA (アリソン・トキタ) (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	Glenn HOOK (グレン・フック) (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑬	11. 1.12 (1999)	Du Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	Sheila SMITH (シーラ・スミス) (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑭	11. 3.16	Edwin A. CRANSTON (エドウィン A. クランストン) (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑮	11. 4.13	William J. TYLER (ウィリアム J. タイラー) (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑯	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖頭陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫⑩	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫⑪	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫⑫	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫⑬	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫⑭	11.12.14	X. Jie YANG 楊 暁捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫⑮	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑯	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑰	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユフスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑫⑨	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⑩	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬⑪	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬⑫	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
⑬⑬	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か?」
⑬⑭	13. 4.10	L.I. Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑮	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭④①	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭④②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キム ラスティーブ Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭④③	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭④④	14. 2.12	マシミリアーノ トマシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 恵卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑮	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学の生命観」
⑮	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑮	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑮	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビット L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

⑩	15. 4. 8 (2003)	ビル スウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ―門付け儀礼の演劇性をめぐって―」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か―金素雲訳『朝鮮詩集』の場合―」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツイゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観―その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって―」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑩	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑩	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亚太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響―家族改革をめぐって―」
167	15.12. 9	エフゲニー S. バクシエーフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所―その構造と形態を中心として―」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア―美を生きる技法―」
⑩	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑩70	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑩71	16. 7.13	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	アレクサンダー マーシャル ヴィーシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役の役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫一戦後の原点」
⑩77	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ... 芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気」
⑩78	17. 3. 8	WU Yongmei 呉 咏梅 (北京日本学研究中心専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって—」
⑩79	17. 4.12	ノエル ジョン ピニンガトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池 明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	イアン ジェームズ マック マレン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブローックカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
⑩	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭 在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベルク Augustin BERQUE (フランス国立社会科学高等研究院教授・日文研外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性」
184	17.10.11	NO Sung Hwan 魯 成煥 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員) 「韓国から見た日本のお盆」
185	17.11.16	セルゲイ ラプチェフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字—古代日本の漢字文化を中心に—」
186	17.12.20	YOUN Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈—なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか—」
187	18. 1.10 (2006)	アンドリュウ ガーストル Andrew GERSTLE (ロンドン大学 SOAS 教授・日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く—肉体表現と流光斎—」
188	18. 2.21	ウィリアム バック ブレックナー William Puck BRECHER (南カリフォルニア大学助手・日文研外来研究員) 「郊外の隠遁への憧れ—江戸時代の郊外における美学的スペース—」
189	18. 3.14	サーレ アーデル アミン SALEH Adel Amin (カイロ大学文学部日本語学科専任講師・日文研外国人研究員) 「『国語』という神話—日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐる—」

①90	18. 4.18 (2006)	KIM Yongui 金 容儀 (全南大学校人文大学副教授・日文研外国人研究員) 「玄界灘を渡った鬼のイメージ-なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか-」
191	18. 5.16	CHOI Park Kwang 崔 博光 (成均館大学校教授・日文研外国人研究員) 「京都と文化表象-18世紀朝鮮通信使の目から-」
192	18. 6.13	LIU Chun Ying 劉 春英 (東北師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「『満州国』時代『新京』に於ける日本人作家」
①93	18. 7.11	ZHOU Wei Hong 周 維宏 (北京日本学研究中心教授・日文研外国人研究員) 「近代化による農村の変貌とその捉え方について-中日農村を比較して-」
①94	18. 9.19	ダリア シュバンバリーテ Dalia SVAMBARYTE (リトアニア ビリニウス大学講師・日文研外国人研究員) 「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって」
①95	18.10.10	エドウィーナ パーマー Edwina PALMER (カンタベリー大学教授・日文研外国人研究員) 「ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」-高等教育の社会科カリキュラムを中心に-」
①96	18.11.14	ヨセフ キブルツ Josef A. KYBURZ (フランス国立科学研究センター教授・日文研外国人研究員) 「お札が語る日本人の神仏信仰」
197	18.12.13	ロバート エスキルドセン Robert ESKILDSEN (日文研外国人研究員) 「異国船物語-江戸後期に描かれた船-」
①98	19. 1.16 (2007)	プラット アブラハム ジョージ Pullattu Abraham GEORGE (ジャワハルラル ネルー大学日本語学科準教授・日文研外国人研究員) 「日印関係とインドにおける日本研究-宮沢賢治の菜食主義の思想-」
199	19. 2.13	スティリアノス パパアレクサンドロポロス Stylianos PAPALEXANDROPOULOS (アテネ大学神学部 準教授 日文研外国人研究員) 「日本仏教論-その思想史的展開をめぐって-」

⑳	19. 3.13 (2007)	LU Liu Di 陸 留弟 (華東師範大学外国語学院日本語学部教授・日文研外国人研究員) 「楽しみの茶と嗜みの茶—中国から見た茶の湯文化—」
㉑	19. 4.18	モハメッド レザ サルカール アラニ Mohammad Reza SARKAR ARANI (アラメ タバタバイ大学教育学部(イラン)助教授・日文研外国人研究員) 「国境を越えた日本の学校文化」
202	19. 5.16	ZHANG Zhejun 張 哲俊 (北京師範大学文学院比較文学研究所教授・日文研外国人研究員) 「唐代文学における日本のイメージ」
㉒	19. 6.13	チャワローリン サウエッタナン Chavalin SVETANANT (チュラーロンコーン大学専任講師・日文研外国人研究員) 「[気]の思想・[ころ]の文化—言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

発行日 2007年10月1日

編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2

電話 (075) 335-2048

ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

©2007 国際日本文化研究センター

- 日時
2007年 6月13日 (水)
午後 2時～ 4時
- 会場
キャンパスプラザ京都

